

# 小さな庭

sari-sari

今夜の三日月と私の心と、どちらの方が鋭くとがっているだろう。ベランダに出て目を閉じ、冷たい空気を胸いっぱい吸い込みながら私は思った。冬の夜の空気はただただ清潔で、体に取り込むとお腹の底から巨大なエネルギーがわきあがってきた。自分は無敵で、どこにでも行けるんじゃないか。

私はこわごわと目を開ける。夥しい数の自転車が止められた駐輪場、ケーキのような可愛らしい建売住宅、びっしりと苔でおおわれ水なんかほとんど流れていない一級河川。

自分はまだどこにも行けなくて、三日月はとがってるんじゃないくて、太陽に照らされているだけで本当は球体、ということを知っているけれど、信じたくない。私は自分で自分が、めんどうだ。月の表面と私の内面なら、私の内側のほうが圧倒的にでこぼこしている。

じゃあ、と私は考える。雪が降ればいいのに。どこかに行けるかもしれないけど、当分ここにいなきゃいけないなら、もういっそ雪の中に閉じ込めてくれ。たっぷりと積もった雪は街を平等に真白く染め、家の中に余計な音を響かせない。まるで世界に私と家族だけが取り残されたように感じて、それもそれでいいか、なんて思ったりして、普段よりも親密な気持ちになれる。そうすれば私たちだって、もう少し……。

こんこんと背後の窓をノックする音で振り向くと、ガラス越しに大沢さんが立っていた。彼はふにやりと笑いながら親指で後ろをさして、お茶、と口パクでこちらに伝えてくる。私もくしゃんと笑顔を作って頷きながら、室内に戻った。

夕食のチキンカレーの匂いが残るリビングは暖かくて、こわばっていた筋肉が少しずつほぐれていく。でも、さっきとっさに出たぎこちない笑顔だけは半端に顔に張り付いたまま、私は次にどんな表情をしたらいいのか分からないでいる。

目の前のソファーにはお母さんと大沢さんが、こちらに背を向けて座っていた。二人はそれぞれソファーの端に腰掛け、私のためのスペースが真中に確保されている。テーブルには二人分の紅茶と私のココア、テレビでは私の好きなお笑い番組、と完璧に用意され私を待ち受けていた。私は軽く下唇をかみ、浅く深呼吸してから

「ねえ、外、すごい寒かったんだよ。手もかじかんじやった」

わざと不機嫌な口調にして、ソファーの真中へどさっと座る。ほら、と私は手の甲をお母さんの頬につけた。目を真ん丸くしながら、母がきゃっと小さな悲鳴をあげた。私はすかさず、ふふふといたずらっぽい笑みを浮かべる。

「寒いも何も、自分が好きこのんで毎晩ベランダに出てるんじゃないの。夕食が終わったらすぐ」

お母さんの反論に答える代わりに、憎たらしくなりすぎぬよう注意しながら私は、いーっと顔をゆがめる。私たちのやり取りを見て、大沢さんは満足そうに笑いながら

「同じ東京でも都内と郊外じゃ景色が違うからなあ。あざ美ちゃんは都会っ子だから、郊外(こっち)の風景もそりゃ珍しく映るさ。とくに、越してから初めての冬だし、なっ？」

そのくだけた調子に私も便乗し、そーだそーだ、と声を上げる。私が十一歳のときに両親は離婚し、お母さんに引き取られた。今年の四月、私の中学校入学にあわせて母は大沢さんと再婚し、私たちは新しい街へとやって来た。

結束した私たちを見て今度は母が満足げな表情をしながら、けれど少し強張った口調で「もう、あんたはすぐにお父さんの側につくんだから」

「だってなあ、お父さんと意見が合うんだもんなあ。なっ？」

大沢さんも何気なさを装いつつ、緊張した声で言う。私は無邪気に、明るく残酷に言う。

「それよりさ、明日の遊園地すっごい楽しみ。月も星も出てたから、ばっちり晴れるよ。新しくできたジェットコースターには、必ず乗ろうね」

母と大沢さんが私の頭の上で、目配せするのが分かった。二人を交互にこっそり横目で見たら、どちらもしょんぼりとしていた。お父さん、なんて絶対呼ばない。傷つけてやろうと思って、傷つけた。私が望んだとおりの結末なのに、なんで胸の中はこんなにもからっぽでさびしいんだろう。

翌日は朝から薄曇りだった。私たちが遊園地で遊んでいるあいだも、雲は着々と厚さと色味を増していく。早めに帰ろう、と言う二人に

「最後に三人で記念にジェットコースターに乗ろう」

と私が提案したため、今、大沢さんが絶叫マシン嫌いの母を説得している。二人は言い争いながらも、どこか嬉しそうだ。なんだか、少しさみしい気持ちになる。その気持ちから目をそらすように、私は周囲を見回した。

幼い男の子が不安な顔をして、一人で頼りなく歩いている。すれ違う人々の中には、心配そうな視線を送る人もいたけれど、誰も声をかけようとはしない。

あざ美、とお母さんが私を呼ぶ。私が目をやると、お母さんは覚悟を決めたわ、と悲壮な声で宣言した。やった、と私は笑いながら、目の端で再び男の子を捉える。遊園地の男性従業員が二人現われ、男の子に話しかけていた。すると男の子は爆発したように泣き始め、従業員が何を聞いても、おとうさんおかあさん、と繰り返し声を震わせ叫んでいる。

私の鼻の先が、束の間ふっと冷たくなった。もしかして、と私が空を見上げると、今の爆発が合図だったかのように雪が舞い始めていた。

「ああ、迷子か。にしても、すさまじい泣きっぷりだな」

大沢さんが苦笑し、お母さんも、親は何してるのかしら、とつぶやく。次の瞬間、二人同時に眼前の白いものに気づき、天を仰いだ。そして視線を戻したあとで目が合うと、どちらともなく照れたように微笑みあった。

私はぎくりとする。目の前に、私の知らない顔を持つ、よく見知った男と女がいた。二人だけの空間があって、そこでは私は完全にのけ者で、ひとりぼっちだ。

「とりあえず乗り場まで行ってみましょう。あざ美、行くわよ」

お母さんの言葉に、私はただ頷くのが精一杯だった。二人は肩を寄せ合い歩き出す。ゆっくりと降る雪に、背中を押されるようにして。

あの子は迷子だと気づいてもらえていいな。二人の後ろを歩きながら私は思う。雪が何かをささやくように耳をかすめ、私は立ち止まって振り返った。

男の子が今まさに、両親と再会するところだった。母親の胸に顔をうずめ泣く男の子を、父親が優しい眼差しで見つめている。

ああ、そっか。私は求めることも、声を上げることもしなかった。誰も気づかないはずだ。思わず苦笑し、はあ、と息がもれる。白い息は思ったよりも震えて、すぐに消えた。なんだか、か弱い祈りみいだ。そう思ったら、私は泣いていた。

もう子どもじゃないから、あの男の子のように大声で泣くことはできない。私は静かに雪のように、涙を流す。凍えていた頬がじんわりと暖かくなり、体温が少しだけ上がった。

「何してるの!？」

私がいなことに気づき、母と大沢さんが戻ってきた。俯き泣いている私を見て二人は、「あざ美ちゃん、平気だよ。きっと雪でもジェットコースターは運転してるって」

「どうしたの、あざ美。寒い？ お腹が減った？」

ちがうよ、ちがう。そんなのが欲しいんじゃない。喉元までせり上がってきた言葉を、私は飲み込む。この違和感は誰にも助けを求めず、打ち明けもせず、私が一人で処理しなければならない。世界には、そんな痛みがあるのだということを、初めて知った。

「いつまでも泣いてないの。ほら、行くわよ」

そう言って母が私の手を取る。私はもう片方の腕で顔をごしごしとぬぐい、そっと大沢さんに手をさしだす。まばらに頼りなく降るこの雪は、きっと積もらない。男の子の頬をつたった涙ぐらい、大粒でなければ。